

〔共同研究：環境と健康〕

研究ノート

「星野鐵男の“環境と健康”観」

津金澤 聡 廣*

1. 「環境と性教育」論

「環境衛生学」ないし「社会衛生学」研究の先覚者のひとりでもある星野鐵男（1890〈明治23〉～1931〈昭和6〉年）については、近年に至ってようやくその業績や足跡を再評価し、見直そうとする気運がみられる。

たとえば、瀧澤利行「近代日本における社会衛生学の展開とその特質」（『日本医史学雑誌』第40巻第2号，1994年6月，日本医史学会）という論文がある。この論文では、星野鐵男を「社会衛生学における『自治』理念の実践化」という視点に立って、考察を進めており、近代日本における社会衛生思想史ならびに社会衛生学史上での星野の業績を改めて高く評価している。

瀧澤利行によれば、星野の社会衛生思想の基本は、人間の健康は自然環境ならびに社会的環境に規定されながら、その生活の総体が、親から子へ、子から子へと継承されている状態であるにとらえられる点にある。したがって、「彼における社会衛生の実践の本質は、次世代へいかに生活の安定と向上の思想と文化を伝えるかという点に集約されるものであった。星野が『社会衛生学』よりも『衛生文化』を好んで用いた理由も、衛生活動の創造的側面、相互形成的側面を強調しようとする意図によるものと理解することが出来る」（同上，19ページ）と述べている。

瀧澤は、さらに、「近代日本の社会衛生学に『自治』精神を内在化させ、星野鐵男の実践に見られるような衛生活動が大衆の自己形成機能や文化形成機能を内包する視点を導いたと考えられる」（同上，20ページ）と評価している。

星野が社会衛生学者として、その短い生涯のなかで、後半生の衛生活動の実践において力点を置いた研究領域のひとつがいわゆる「性教育」の問題であった。

これらの点について、井上忠司「星野鐵男と大正文化」および、石川弘義「星野鐵男の『性教育』論」（共に、星野命編『異文化間関係学の現在——旅・異文化・人生』金子書房，1992年）という論稿がある。両者とも主に星野鐵男の「性教育」についての実践的提唱に注

*本学社会学部

キーワード：環境衛生学，星野鐵男，健康観

目して、その人と学問の特質について論述している。

たとえば、井上忠司は、星野鐵男の生涯をたどりながら、社会衛生学者としての星野がもっとも活躍した時期が、1920年代のいわゆる大正デモクラシーの時代を背景にしていることに着目する。その一例として、性の問題にしても、時の為政者にとっては取締りの対象であったのに対し、星野はあくまでひとりの教育者として、それに対峙しようとした。その彼の思想は、次のような定義のなかにもっとも端的に表明されている、という。

「性教育とは性意識の下に、身心の健全なる発育を目的として、出生より結婚後の数年にわたりて実施する性に関しての養育と情育と知育とをいうのである。」(星野鐵男『復刻版・性教育』日本学校保健研究所, 1981年, 所収)

星野は1927年(急逝する4年前, 37才の折に)に「性教育に就て」という論文を発表しているが、その中でも、社会衛生学についての星野の基本的考え方が明確に示されている。

「衛生学は吾人の生活する自然的環境及び社会的環境を健康との相互関係に於て研究し、又健康を増進せしむる方策を研究する科学なり。

研究の対象となるものは吾々の健康である。健康を左右する環境である。吾々は社会という吾々の集団の中に生れ、生長し、教育され、生産し、消費、結婚し、出産し、死亡するものであることは余りに明らかなことであるが、此の間に於いて絶えず吾々の健康と関係をもつものは社会であると同時に自然界の諸現象であるから、吾々は此の社会的また自然的環境を無視して健康を研究することは出来ぬのである。」(「性教育に就て」金沢医科大学衛生学教室内 衛生文化思想普及会¹⁾, 1927年)

星野の性教育論も、彼の衛生文化、生活文化に対する基本的考え方の根本に根をもつものであり、つまり生活するということは、男性と女性の肉体的、精神的健康によって担われるのであり、男女の健康を増進することと性教育とは密接な関係をもっている、とする。

さきにふれた「身心の健全なる発育」を目的として、性教育の時期を単に青少年期に限らず、出生直後から結婚後の数年にまでわたるものである。すなわち、乳幼児期、少年期、青年期、結婚前後期、それぞれの時期に対応して、「先ず性に関しての意志と感情の教育に即ち性の徳育と体力に力を入れてから後初めて性の知識を授くべきである」と述べている。

そして「性教育をなす人」は、両親、教師、その他の関係者であるが、特に両親についていえば、その資格は、第一にその子との信任関係、第二は親たる愛情を隠すこと(子の教育という点より見る時は親は親であってはならぬ)、第三に性教育の方法如何を知らずして行うことはできないこと(ひとりの子に働きかける社会的自然的要素は多種多様である。親はそれぞれに応じて適当なる方法を考え出すべきである。絶えず観察し工夫し研究せねばならぬ)である。

1) 「衛生文化思想普及会」は、星野鐵男を代表として、金沢医科大学衛生学研究室内に設置され、教室員や金沢在住の医師等を中心に組織されていた。同会は星野の主唱によって活動の目的は主に北陸地域における衛生知識・思想の普及にあった。自費刊行された『衛生文化パンフレット』は、星野の存命中に第24輯まで刊行された。

たとえば、乳幼児期においては、特に意志の力を養うことと感情の教育が大切である。意志教育では赤子の要求する過度の欲望に要じてはならぬことや乳児をみだりに抱きあげてはならぬと述べている。感情教育については清潔感を養うこと、清潔の実行、美への感情、友愛の感情が大切である。それが、性に関する養育と情育とに関係する。

そして、性教育とは、性の意識の問題であり、性の自覚、性的生命の成長（性愛、友愛、新性愛、聖愛）である。性の意志であり、感情であり、性の知識である。つまり、性を取りまいて起る諸問題のすべてと関係ある教育である。したがって、「性教育を行はんとする者」はまず人間性の深さ広さ高さを学ばなければならぬ、と説く。まさに性教育とは生活する男女の「健康」そのものと深く関連した課題なのであった。

石川弘義は、星野鐵男を中心に、大正中期から昭和初期における「性」と「性研究」状況について、要旨次のように結論づけてまとめている。

すなわち、「おそらくは関西中心であった山本宣治、太田武夫らとのコンタクトも無いまゝに、あれほど独創的な性教育の理論と實際を構築していった星野鐵男は、つねにパイオニアの孤独をかみしめていたに違いない。そうして、歴史に『イフ』(if) は禁物であることを承知のうえで書くのだが、もし星野、山本の二人が早逝しなかったなら、日本の『性』、『性研究』状況はもっと早いテンポで変化していったに違いない。」(前掲書、229ページ)

井上忠司、石川弘義は共に星野の性教育論の独創性に着目し、これまでの日本の性研究にみられなかった環境と健康をめぐる人間生活との深い関わりのなかで、性研究を位置づけようと実践した星野の性教育論を改めて高く評価している。

2. 「月島調査」から「田園都市」調査へ

星野鐵男は、旧制群馬県立沼田中学校卒業後、1909（明治42）年、旧制第二高等学校（医科）に入学、1912（大正元）年、東京帝国大学医科大学に入学し、医学を学ぶかたわら、長く待望していた東京郊外柏木における内村鑑三の聖書講筵に列することを許され、その門下生となった。そして、その門下生のうち、南原繁、坂田祐、鈴木錠之助、松本実三、高谷道男、石田三次ら七名で（その後、さらに、植木良佐、小出義彦、高田運吉、松田寿比古、松田亨爾、土屋禎らも参加）「白雨会」²⁾を結成した。この「白雨会」の友人たちとは、生涯にわたって深い交わりを保った。

1917（大正6）年12月東京帝国大学を卒業、同学の友、植木良佐によれば「当時殆ど顧られなかった衛生学教室」に入った。（植木良佐「星野鐵男君を憶ふ」村上賢三・木村與一編

2) 「白雨会」とは、旧約聖書詩篇第65編第10節に基づく「神の恩恵なる白雨」にちなんで命名されたとのことである。星野は、その会員たちとはまさに生涯にわたって親密な交わりを保ち、とりわけ、南原繁とは、鐵男の愛妹・百合子（きく子）が南原の最初の妻（百合子は1925年に急逝）となるほどの兄弟としての深い交わりだった。

星野鐵男と「白雨会」については、村上賢三・木村與一編『星野鐵男』（衛生文化思想普及会、1933年）に所収の坂田祐「星野君と白雨会」、高谷道男「白雨会と星野君」、植木良佐「星野鐵男君を憶ふ」等参照。

『星野鐵男』衛生文化思想普及会、1933年、127ページ）間もなく恩師の推薦もあり、内務省保健衛生調査会による高野岩三郎を中心とする東京市京橋区月島における労働者についての初の総合的な生活実態調査（内務省衛生局による略称・「月島調査」1918～1920年）に内務省囑託として参加した。

この「月島調査」については、すでに多くの指摘や考察が進められているように、その調査報告は、1921（大正10）年5月に内務省衛生局より『東京市京橋区月島における実地調査報告』として出版された（その復刻版は、1970年、光生館より生活古典叢書第6巻『月島調査』〈解説・関谷耕一〉として出版されている。）

「月島調査」は、高野岩三郎の指導のもとに、労働者の密集した都市地域社会を対象としたはじめての総合的調査であり、労働者の人工動態、衛生状態、労働条件から社会の階級構成にわたる総合的立体的社会調査（Social Survey）として、まさに先駆的で画期的な研究成果を残した。

大島清はこの調査の概要とその方法の特徴を次のように的確に要約している。

「月島は隅田川の川口にある三角州で、つくだ煮と監獄で名高い佃島、それに埋立て地の新佃島と月島からなる人口約三万の一地域。ここは石川島造船所はじめ第一次大戦中の軍需景気の波にのって族生した大小の機械工場が軒を接し、その周辺は熟練工の密集地帯であった。江戸の名残りをのこす古びた民家や漁家のたたずまい、労働を終えた職工が一杯ひっかける屋台のおでん屋、風呂屋と米屋と寄席のある町の一角に、高野は調査所を設置した。この根拠地に彼の有能な調査員として山名義鶴、権田保之助および星野鐵男が寝泊まりし、町内の住民と毎日あいさつを交しながら調査をすすめた。山名義鶴は男爵の社会運動家としてよく新聞ダネになる男、権田はドイツ語の達人で民衆娯楽の研究者、そして星野は東大出の医学士で南原繁の義兄、のちに金沢医大（引用者注、旧制金澤医科大学、現金沢大学医学部）の教授となり社会教育にも尽力した篤学の士。このほかに後藤貞二——のちに大原社会問題研究所のチーフ・ライブラリアンとして立派な仕事をした人——が加わった。」（大島清『人に志あり』岩波書店、1974年、116ページ）

さらに大島は、次のような調査の特徴についてもふれている。すなわち、

「星野は幼稚園と小学校に通って3000名をこえる児童の身体検査を実施した。上水道・下水道から糞尿処理やゴミの排出量まで衛生環境をくまなく調べ、また住民の疾病や死因統計を作成した。権田は労働者の娯楽はもちろん、彼らの結婚と離婚、家計のやりくりから子供と駄菓子屋の関係まで社会生活のディテールを異常な熱心さをもって洗いあげた。山名は主として機械工場における労働時間や労賃などを調査した。」（大島清『前掲書』117ページ）

「月島調査」の特徴は、これら実地踏査だけにとどまらず、官庁の既存資料と実地調査からのデータを元に各種の統計を作成し、その統計分析によって一地域内の住民の生活状態と社会階級構成を明らかにした。これらの方法は、「高野の持論である社会統計学的方法のソシアル・サーヴェーへの応用」として大島は高く評価している。（『前掲書』117ページ）

星野鐵男が「月島調査」についてまとめた報告書は、「月島に於ける労働者の衛生状態」としてまとめられているが、この調査体験は、星野の学問的研究のもうひとつの出発点ともなっていよう。

その報告論文によれば、まず、この地域の社会地図の作成と共に、月島における過去の衛生状態について、たとえば、明治42年より大正7年に至る10年間の死亡原因も丹念に調査し、その統計分析を進めた。また、さきに大島清もふれているように、一般衛生状態については、上・下水道、ゴミの年月別排出量、排便状況、街路の実態、衛生組合等についても調査し、月島の小学児童身体検査と共にその家庭での養育史についても実態調査を実施した。さらに、労働者の身体検査は、成年工と少年工にわけて調べ、それぞれ労働者家族の栄養状況やその献立表およびそのカロリー計算まで、綿密な事例研究を担当している。

この調査体験のなかで、星野がとりわけ驚きをもって痛感したのは、多くの労働者の劣悪な住居環境についてである。上・下水道や通路の状態、換気や採光の状態など詳細に実施調査した結果、特に不良長屋に関して、次のように報告している。最も進歩した長屋もあるが、

「之に反し旧式の不潔なる長屋に至りては土台は直ちに地上に据えられ、床下極めて低く或は全く床下なくして土間に起居せねばならぬやうなものがある。屋根は黒色ブリキ葺であって、室内暗く（或ものは全く光を仰ぐこと出来ぬものがある）空気は悪臭を放ち、共同便所は開放せられし、にして食事中でも臭気鼻をつき、下水亦停滞して狭く屈曲してゐる通路を汚して児童等の遊戯する所ない程である。厳寒には寒風遠慮なく屋内を見舞ひ、酷暑にはブリキ屋根熱して家内蒸さるゝやうである。そして数戸又は十数戸連結して一棟の長屋をなしてゐる。」（復刻版『月島調査』光生館、1970年、203ページ）

こうした劣悪な長屋生活は、星野にとって想像を絶する状況であり、次のようにも書いている。

「月島通に面せる十戸の如き複雑なる構造であって、床下なく地上に藁を敷きて茲に起居するものあり、光線全く入り来らぬ所に住するものあり、三畳に六人の密度を以て暗黒裡に起居するものあり、便所は眼前に横はり開放せられて悪臭食膳を襲ふといふ有様下水の排除は不良であって氾濫又氾濫、共用水道栓は二個を三十一戸にして使用してゐるのである。かゝる長屋に人は住んでよいのであらうか、住まいしておいてよいものであらうかと思はざるを得ぬやうな感を與ふるものである。野原の鳥獣の方が遙かに気持よい住家を有てるのではあるまいか。」（『前掲書』206ページ）

星野は「かかる長屋に人は住んでよいのであらうか」と問い、「野原の鳥獣の方が遙かに気持よい住家をもっているのではあるまいか」と率直に憤りを表明している。

1920（大正9）年には、大石みその（京都の大石和太郎長女）と31才の時結婚、司式は内村鑑三によって行われた。その日のことを内村は「日記」に次のように書いている。

「10月28日（木）晴、少しずつ快し、前約に従い医学士星野鐵男対大石ミソノの結婚式を司った。この任に当り得るだけ健康が回復し居りしことを感謝する。実に美わしき式で

あった。簡単で、誠実で、神聖で、一同歓喜に充たされた。」(山本泰次郎編『内村鑑三 日記書簡全集』第1巻, 教文館, 1964年, 314ページ)

この翌年, 1921(大正10)年に, 東京帝国大学医学部助手に任命され, 1922年には恩師の推薦で新設の金沢医科大学(現・金沢大学医学部の前身)教授に内定した後, 1922年春より1924(大正13)年5月まで文部省から留学を命じられ, 2年間欧米諸国で在外研究に従事することとなった。この間の事情について, 白雨会の友人, 植木良佐は, 「人は皆教授の肩書で行き度がるのに, 彼は平気で東大助手として出かけた。」と書いている。(『前掲書』128ページ)

星野の2年間の文部省派遣による留学は, 主にアメリカ合衆国およびドイツ, イギリスにおける衛生学研究のためであったが, 星野にとってこの留学中, イギリスにおける世界最初の「田園都市(The First Garden City) レッチワース(Letchworth)への訪問調査は, その衛生学研究の上からもかなり新鮮な印象を残したものだっただろう。

日本においても, レッチワースにおける「田園都市」については, エベネザード・ハワード(Ebenezer Howard)の最初の書物‘To-morrow: A Peaceful Path to Real Reform’ 1898. やその改訂版, ‘Garden Cities of To-morrow’ 1902, によって知られており, 後者や1905年に出たA・R・センネット(A. R. Sennett ‘Garden Cities in Theory and Practice’)の書物はわが国にもいち早く紹介された。たとえば, 1907(明治40)年には, 内務省地方局有志編として『田園都市』が出版されている。これは, イギリスや西欧諸国における田園都市建設の最初の動きを詳細に分析, 紹介すると共に, わが国における「田園都市」「花園都市」づくりの方向についても多くの分析や提案を試みた貴重な歴史的文献である。(香山健一「田園都市 国家への道」内務省地方局有志『田園都市と日本人』〈復刻版〉(講談社学術文庫, 1980年) 1~8ページ参照)

これらの動向について, 星野は衛生学者として強い関心を抱いていたにちががなく, さきに星野が従事した「月島調査」の体験に照らしても, 労働者やその家族のための新しい田園都市建設の実態については, つぶさに調査したいという希望をもっていたと思われる。

このイギリス留学を機に, この時期実際に「田園都市」レッチワースを訪問し実態調査を実施したのは, 生江孝之について星野は, その数少ない日本人のひとりだった。

3. 田園都市レッチワース調査報告をめぐって

星野がレッチワースを訪問し, 実地調査をしたのは1923(大正12)年で, 彼は1924年5月に帰国し, 金沢医科大学初代衛生学教授兼金沢医科大学附属医学専門部教授に任ぜられて, 早速, その6月には「田園都市の発達」と題する帰朝講演を行っている。その内容は『金沢医科大学十全会雑誌』1924年, に掲載された。つまり, 帰朝講演のテーマが, イギリスにおける「田園都市の発達」であったことは, 星野がその動向に強い印象をもったことを意味している。その後の彼の「衣・食・住」ではなく, 「住・食・衣」の思想とも深い関連があり,

生活環境と健康問題では住居環境やそのあるべき都市生活がいかに大切かを説きつづけたもうひとつの出発点ともなっている。

この帰朝報告では、まず、19世紀末に始まった田園都市運動の起源とその発達について述べ、次のように書き出している。

「英国における産業革命の結果は、農村の衰退、都市の膨張を来し都市は拡大するに従ってその労働者区域の非衛生的状態を現出した（後略）。」（星野鐵男「田園都市の発達」『金沢医科大学十全会雑誌』1924年、111ページ）

つまり、日光充分なる農村は、清風薫る村落より大都市に流入したかつての田園の民は、今や煤煙と濃霧に閉ざされ、文明の奇現象ともいふべき「貧民窟」に永住する悲しい運命に陥ったという。こうした状況は、日本における近代化、産業化の進行過程とも重なり合っ

て星野の眼には映ったにちがいない。ところが、イギリスでは、農村を捨てて大都市への集中が進み、大都市内部に非衛生的生活の地域が拡大するに対応して、初めてここに「貧者の救済」を目的として、たとえば社会思想家・ロバート・オーエンの新労働村建設（1799年、ニュー・ラナークという紡績工場の労働者のためのコミュニティ建設）などをきっかけに、その後、労働者の生活改善のためのさまざまな都市新設案が次々と現われたのである。エベネザー・ハワードによる近代田園都市運動もそのひとつの有力な流れの中にあり、彼の提唱する田園の自然と都市の利便、健康設備をあわせもつ田園都市の実現は、多くの民衆にまさに熱望されていたのだった。

これらの提唱は、当時の世評ではユートピアン

の夢として、その実現の可能性が危ぶまれたが、ハワードは、構想実現の手段として田園都市協会（Garden City Association）および第一田園都市会社設立を成し遂げ、現実に「田園都市」レッチワースを誕生させた。星野鐵男は、この間の田園都市発展過程を実に詳細に丹念に分析し、紹介しており、その内容は、後年に至る「田園都市」成立過程研究の成果と比較しても、まさにその先駆的的確な分析であり、優れた研究論文として高く評価されよう。

この論文についての詳細な紹介はここでは省略せざるを得ないが、星野はさらに、第二の田園都市ウエルウィン（Welwyn Garden City）も訪れて調査しており、これら田園都市で最も着目したのは、そこに住む人々の健康状態であった。その点も詳しく分析し、たとえば英国全体の死亡率とりわけ、乳児の死亡率比較では、田園都市の健康状態が非常に良好な結果がみられ、これをさらに、東京、大阪、金沢における当時の乳児の死亡率と比べても、日本のそれが高すぎる点を指摘している。

すなわち、今後めざすべき健康な生活を考えてゆく上で、「田園都市の出現とその将来における発達如何は社会の健康如何と大なる関係を有するものと見るを得べく、医学者、衛生学者の又大いに注意すべきこと」（前掲論文、118ページ）と述べている。この訪問では偶然「汽車にてハワード氏は恰も余の隣席にありて余がレッチワース訪問の目的あることを察し親切に説明して処々に紹介して呉れたことは感謝するところである」（前掲論文、115ページ）

ジ) とその貴重な体験にもふれている。

4. 「住・食・衣」の思想と健康

植木良佐は星野鐵男の学問とその生き方について次のように述べている。

「彼は小さい論文や報告を作る事に余り頓着しなかった。彼の着眼は今少し高く、従来研究室に閉じ込められて窒息しかゝって居た我国の衛生学を、広い自由の天地に解放し、医学者間にまで医学の小分科としか見做されなかったものを、医学其物と対立すべき本来の位置に戻し、又これを一部専門家の手から解放して、一般家庭の日常生活に織り込まうとした。それが彼の目的であったと。

厚い信仰に根ざして人生の深い理解を持ち、観察の鋭さと応用の自由さとに特に恵まれた彼は、かゝる事に就いて最適材であった。

見るべし、彼は独り学内に止らず、出で、は北陸の天地を嵐の如く駆け廻って、靈魂と肉体との聖潔を呼号した」(前掲書、129ページ)

星野は自らの生涯を支配している二つの重要なものとは、ひとつは医学であり、他は聖書の研究である(『前掲書』135ページ)と述べているが、帰国後、彼はキリスト教の伝導活動のほか北陸各地での講演会や出版による衛生文化啓蒙活動を活発に展開した。たとえば、1925(大正14)年には恩師横手千代之助の在職25周年記念出版に当り、横手社会衛生叢書第四冊『住宅問題』を分担執筆している。この論稿はその後の星野の住環境論への基本的視点が提出されている点でも注目される。その概要については、拙論文「星野鐵男の生活文化論」(『関西学院大学社会学部紀要第87号』2000年)に紹介したが、健康を保ちまた健康を増進するために住宅づくりの諸条件を合理的に整備することの必要を詳細かつ丹念に提唱し、自らそのモデルハウスを金沢市内に設計、監督し、その新築の家に住んだ。

この論稿では、たとえば、家は、その内に住む人々と共に変化し成長してゆくべきもので、住む者を一歩一歩高め深めるよう工夫をこらす必要がある。ことに成長期にある児童にとって、家は絶えずその成長を助長し健康を増進するよう理想を以て工夫考案さるべきである、と考える。健康の増進とは、肉体と精神との両者のそれであり、家はこの両者の健康を増進し維持する生活環境である点を強調している。

ここで指摘された住生活環境が健康にとって最重要課題であることは、その後も随所で強調しており、1929(昭和4)年に刊行された「東西の衣食住」(『衛生文化思想普及会パンフレット』第13輯)では、たとえば、子孫に富を残すということは、実は「子孫のために独立自治生活をするに足る健康と知識と高潔なる品性を遺産として与えることが最も大切」と指摘し、「子孫の健康のためには栄養ある食物を与え、健康なる家に住わせ、身体の鍛錬を計りて幼少の頃より健康の増進に注意せねばなりません」と述べる。

さらに、従来は〈衣食住〉と申してきましたが、「肝要なるものより順に並ぶるとすれば、住食衣と全く倒になすべきであります」と住・食・衣の思想を提唱している。(『前掲パンフ

レット』29～30ページ)

星野のこの住宅環境論は、安部磯雄の「家庭経営」の原則という説の延長線上に位置する。すなわち、安部の『理想の人』（金尾文淵堂，1906年，82～94ページ）によれば，家庭の幸福の第一条件が健康ということにあるとすれば，まず住宅の選択を第一とし，食物の質に注意することを第二とし，衣服のことはこれを第三に置かねばならぬ，と指摘している。

あるいは，1927（昭和2）年には，『清潔の徹底』『環境の浄化』『正しい生き方』という3部作が『衛生文化パンフレット』第2～4輯として刊行されている。環境と健康観という点に関していえば，とりわけ第二篇の『環境の浄化』では，文化的存在としての人間にふさわしい健康とは何かについて多角的に論及されている。

彼のいう「浄化」とは，たとえば汚れた空気をきれいな空気にすることであり，飲料に適せぬ水をおある方法で清潔な水にするのである。さらに「環境の浄化」とは，私たちの生活環境の健康に適せぬ状態を，健康に適する状態に整えることであるという。少なくとも30年50年先を予想して一日も早く都市の「田園化」を計らねばならぬと警鐘を鳴らし，これこそ緊急の課題だと指摘している。

「世には大都市を以て誇る愚かな者がいます。かかる愚かな者によって環境は汚されて来るのであります。厩大なる田園味に欠ける都市は，近世産業の生み出した一つの社会的悪であります。」（『清潔の徹底』衛生文化思想普及会，〈再版合体版〉1930，93～96ページ参照）

つまり，都市にももっと充分な光と空気とを必要としている。その「住居の浄化」とは，まず家の周囲に，空地を設けること，街路を広く，横丁をもっと多くし，空地には緑樹を植える。しかも間取りもゆとりのある大きな部屋にし，光をたっぷりとり入れる。子供は自然の懐において教育すべきものであるから，広々とした運動場が欲しい。病人にとって最もよい薬は，自然と親切的な静かな看護だから，病院は緑の樹木に包まれた，散歩道のある環境に建築され，経営されなければならないはずだ，という。（津金澤「星野鐵男の『環境浄化論』」『月刊・健康』1999年3月号）

星野は，常に「健康な住心地のよい，明るい社会」の実現を願っているのだが，その現実認識は鋭い洞察力に満ちていよう。

「日本の社会を見ますと，混沌としているのではないですか。子供の時から，のびのびと成長することの難しい社会ではないですか。人が多くて仕事が少ない社会ではないですか。表面的な礼儀はあっても，内心からの親切の少ない社会ではないですか。結核やチフスやら，肺炎やら消化器病やら，願わしからぬ病気の常に多い，不安な社会ではないですか。働いても働いても，収入の増える事も少ない，悲しい社会ではないですか。私は思うと憂うつに閉ざされるのです。」（前掲『清潔の徹底』75ページ）

星野のいう「環境の浄化」「都市の田園化」の提唱は，ユートピアに近い感もなきにしもあらずだが，こうした真剣な取り組みや改善への勇気ある発言が，今からすでに80年前にな

されていることに注目したい。そして、その現実の日本社会に対する鋭い洞察は、今なお新鮮な切実さで迫ってくる。

このほか、1928（昭和3）年には、『衛生文化パンフレット』のシリーズとして、『家の話』『顔の話』『窓の話』といったユニークな3部作も発表している。さらに、1929年には『健康増進に必要な知識』を第14輯として発行、翌年には『愛児のために何を為すか』、1931（昭和6）年4月には『養教育の神髄』を『衛生文化パンフレット』第21～22輯として発行している。

その年11月下旬に、医師のすすめに従い、「気候暖き阪神地方」に転地療養に出かけたが、病床で執筆したという『性教育の実際』を出版した後、突然急病で入院となり、同年12月20日、満41才という短い生涯を閉じ、召天された。（前掲『星野鐵男』9ページ）

星野の「環境と健康」観を明らかにするためには、彼のキリスト教の信仰と伝導活動との深い関わりと切り離して論ずることは一面的のそしりを免れないが、これらは今後の課題となろう。ただし、この問題については、すでに、星野達雄による多くの研究が発表されている。たとえば、『星野光多と群馬のキリスト教』（キリスト新聞社、1987年）、『からし種一粒から——星野るいとその一族』（ドメス出版、1994年）、「内村鑑三を師とする星野鐵男」（『内村鑑三研究』第31号、1995年11月）、『群馬の里から』（枝門舎、1997年）などなどである。当面はまず、これらの貴重な研究成果を学ぶことから出発したい。

〈付記〉本研究ノートは、桃山学院大学総合研究所2004～5年度）共同研究「環境と健康」（代表・高橋ひとみ教授）の研究成果の一部である。記して感謝します。